

## 平成 30 年度 学校経営計画及び学校評価

## 1 めざす学校像

自身のコンディションを把握する力、目標の実現に向けて取り組む力、病気と向き合う気力、  
自身を大切に思うとともに、周囲の人を大切に思うところ “これらを育むために”

- 1 一人ひとりの「学ぶ意欲」を引き出し、「学ぶ楽しさ」を実感することで治療に立ち向かう“こころ”を育てます。
- 2 病気療養中の児童生徒が安心して学び、安全に学ぶことで、健康回復への意欲を育てる学校をめざします。
- 3 さまざまな人とのつながりを通して、児童生徒が目標を持ち、将来の夢を実現することができる学校をめざします。
- 4 病気療養中の児童生徒の教育の理解を図り、支援学校のセンター的機能を果たす専門性の向上に努めます。

## 2 中期的目標

- 1 児童生徒一人ひとりに応じた学力等の向上
  - (1) 「学習空白」等を補完するだけでなく入院中の学習の機会を積極的にとらえ、一人ひとりに必要な学習形態の構築をめざす。
  - (2) 病状を改善し病気を理解するための知識や心を育てるとともに、病気に対する自己管理能力を育てる。
  - (3) ICT機器の活用など教材教具の工夫、内容精選を図り、「わかる喜び」「できる楽しさ」を実感できる授業を実現する。
- 2 「安心で安全」な学校づくり
  - (1) 施設設備の日常的な点検を行い、災害時における「行動マニュアル」の作成、「備蓄品」等の整備などの学校環境を整える。
  - (2) 医療・福祉・心理・人権等に関する基礎的知識を向上することで、児童生徒や保護者の思いに寄り添う学校環境を造る。
  - (3) 前籍校や関係機関との連携のもと、健康回復への意欲を育て、円滑な前籍校への復帰をめざす。
- 3 自己と他者との関係づくりをすすめ、自身の夢を実現できる学校づくり
  - (1) 病気への不安や家族・友人と離れた孤独感を克服し、病気の理解と自己の理解を進める。
  - (2) 学校行事等を通じて、周囲の人々や地域社会との繋がりを実感し、「自己肯定感」を育てる。
  - (3) キャリア教育の充実を図り、一人ひとりが自己実現に向けて具体的に考える力を養う。
- 4 病弱教育の専門性の向上とセンター的機能の発揮
  - (1) 本人・保護者のニーズ、在籍期間を考慮した上での「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の活用を推進する。
  - (2) 学校外での研修に積極的に参加し、伝達講習等を行うことで、学校全体の教育力の向上に努める。
  - (3) 病弱教育の理解促進を図り、支援のニーズの把握に務め、府内外に病弱教育に関する情報発信を行うとともに教育相談を積極的に受け入れる。
- 5 組織力の向上
  - (1) 各部・各分教室で異なる医療・教育環境に対応し、適切な教育活動を展開できるように分掌組織を再考する。
  - (2) 各部・各分教室間において、教材・実践事例等の共有を促進し、教育活動の共通理解に努める。
  - (3) 医療・福祉・前籍校との連携を深めて協力することで、児童生徒の学習環境の適正化を図る。

## 【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 30 年 11 月実施分]	学校運営協議会からの意見
<p>○児童生徒、保護者、教職員、医療関係者を対象に実施</p> <p>【学習指導等】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「児童生徒が学校を楽しんでいるか」という質問における肯定的評価は、児童生徒が 89%、保護者が 92%、医療関係者が 84%と比較的高い評価であった。一方で、授業の工夫や分かりやすさは、児童生徒が 82%、保護者が 87%と低くなっている。「学ぶ楽しさを実感する」という目標を考えると、授業力の向上という点においてさらに研鑽を積む必要がある。</li> </ul> <p>【生徒指導等】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「自分の将来や進路について考える機会がある」という質問における肯定的評価は、児童生徒が 63%、保護者が 86%で、児童生徒の評価が低くなっている。病弱支援学校においては転入転出が不確定で、進路指導・キャリア教育の学習時に在籍していないことがあるため、一人ひとりの状況に合った、個別の相談支援を行うことが重要である。</li> </ul> <p>【学校運営等】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者対象のアンケートにおいて、無回答が 20%を超えている項目が 8 項目あった。特に、「保護者間の交流」「学校行事における工夫」「保護者の悩みや相談への対応」については、約 50%が無回答であり、保護者との連携が十分にできているとは言えない結果である。在籍期間の短さという時間的な制約はあるものの、入院中の児童生徒の看病や付き添い、自宅の家事等で忙しくされている保護者に寄り添い、支援する取組みを進める必要がある。</li> <li>・病弱支援学校にとって、医療関係者との信頼関係は非常に重要である。今回の結果では、「問題への迅速な対応」の質問に対する肯定的評価が 84%となっており、昨年度より 27 ポイント増加した。また、「病棟と連携して教育活動を行っている」という質問においても 87%と、7 ポイント増加している。今後も、さらに信頼関係が向上するよう連携を進めていきたい。また、記述部分について、医教連絡会等を通して病棟と共有し、必要に応じて課題解決を図ることで、相互理解を深める機会としたい。</li> </ul>	<p>第 1 回 (6/25)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○平成 30 年度の取組みについて           <ul style="list-style-type: none"> <li>・新学習指導要領に沿った教育課程の見直しが重要である。</li> </ul> </li> <li>○子どもの安全について           <ul style="list-style-type: none"> <li>・大阪北部地震の際の各部署の状況報告と災害時の対応について確認を行った。</li> </ul> </li> <li>○学校運営協議会委員からの要望           <ul style="list-style-type: none"> <li>・支援学校は外部から見えにくい部分もある。見学があれば理解が深まるのではないかと、本校教育部以外の分教室も見学したい。</li> </ul> </li> </ul> <p>第 2 回 (11/19)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ICT の活用について           <ul style="list-style-type: none"> <li>・ICT を活用した教育は重要である。VR カメラなどで地域校の教室の映像をリアルに感じれば、復学もしやすくなる。一方で、あまりにもリアルになりすぎると、VR から離れた後の喪失感が大きくなり、心理的に落ち込んでしまうことになる。ICT の活用には注意が必要である。</li> <li>・世界の流れはすさまじいスピードで進んでいる。ICT 教育について変化に対応できるような万全な準備が必要である。</li> </ul> </li> <li>○道徳教育について           <ul style="list-style-type: none"> <li>・病弱の支援学校に合うように進める必要がある。</li> <li>・評価については、どのように児童生徒の返していくのかを考える必要がある。</li> </ul> </li> <li>○センター的機能について           <ul style="list-style-type: none"> <li>・サミットやセミナー等、定着していることはすばらしい。</li> <li>・卒業後の生活などのお話は、参考になるので今後も続けていただきたい。</li> </ul> </li> </ul> <p>第 3 回 (2/18)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○平成 30 年度学校評価及び平成 31 年度学校経営計画について→承認された           <ul style="list-style-type: none"> <li>・部署ごとで子どもの実態の異なる刀根山支援学校では、学校教育自己診断の結果を評価指標に結びつけにくいのではないかと、学校運営協議会の意見を参考にしているかどうか。</li> <li>・数値での評価指標ではなく、質的な情報を加えて評価を考えてはどうか。</li> </ul> </li> <li>○平成 30 年度学校教育自己診断結果について           <ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者への情報提供の方法を考えていくとよい。</li> </ul> </li> </ul>

## 3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 児童生徒一人ひとりの状況に応じた学力等の向上	<p>(1)「学習空白」等を補完するだけでなく、一人ひとりに必要な学習形態の構築をめざす</p> <p>(2)病気を理解し病状を改善するための知識や心を育て、病気に対する自己管理能力を育てる</p> <p>(3)ICT 機器の活用など教材教具の工夫、内容の精選を図り、「わかる喜び」「できる楽しさ」を実感できる授業を実現する</p>	<p>(1)分教室間の交流を活発にし、小学部・中学部で教科の観点別評価及び授業力の共通理解に努め、教科を中心とした分教室間の情報の共有と教育活動の共通理解に努める。</p> <p>(2)・児童生徒・保護者の思いに配慮しながら、病気と向き合う機会を模索する。 ・児童生徒が自身の体調を客観的に把握し、自己管理ができるように取り組む。</p> <p>(3)・TV 会議システムやタブレット端末を活発に活用し、インターネット等からの情報を授業に導入する。 ・校内の ICT 環境の充実の務め、各部・各分教室の連絡や情報の共有化に努める。</p>	<p>(1)教科会を定期的実施し、学習評価の共通理解を進める。学校教育自己診断の児童生徒・保護者向け質問の肯定率を 95%以上にする。(H29 年度児童生徒 85%、保護者 92%)</p> <p>(2)保護者の来院時の面談を定期的に行い、児童生徒の個別の病状把握や保護者の悩み等を受け止める。</p> <p>(3)他の病弱支援学校との ICT に係る情報の交流に努める。学校教育自己診断の児童生徒向け質問の肯定率を 95%以上にする。(H29 年度児童生徒 91%)</p>	<p>(1)学校教育自己診断では、「授業の工夫」に対して、肯定的評価をした児童生徒が 82%、保護者が 87%と前年度と比較して、肯定的評価が減少した。この結果を真摯に受け止め、次年度は授業力の向上に焦点を当てたい。(△)</p> <p>(2)転入時等の教育相談(315 回)において、児童生徒の病状の把握、保護者の悩み等の相談を行ったが、今後はそれに加えて、児童生徒自身での体調管理について取組みを進めていきたい。(○)</p> <p>(3)すべての部署において、タブレットを活用し、実験授業の補充等を進めている。また、3 部署で ICT を活用して、部署間や外部のボランティア等と交流を行っている。学校教育自己診断における児童生徒の評価は 87%と減少しているので、さらに工夫を重ねたい。(△)</p>
2 「安心で安全な学校づくり」	<p>(1)施設設備の日常的な点検を行い、災害時における「行動マニュアル」の作成、「備蓄品」等の整備などの学校環境を整える</p> <p>(2)医療・福祉・心理・人権等の基礎知識を向上することで、児童生徒や保護者の思いに寄り添う学校環境を造る</p> <p>(3)前籍校や関係機関との連携のもと、健康回復の意欲を育て、円滑な前籍校への復帰をめざす</p>	<p>(1)・施設設備の安全点検に務める。全部署における「備蓄品リスト」の更新と危機管理マニュアル、防犯及び防災計画を更新する。 ・本校教育部における災害時の帰宅に係る「行動マニュアル」の更新を行い、病院との共通理解に務める。 ・災害時の対応や防災の取り組みは、保護者への情報の提供に努める。</p> <p>(2)・支援の観点の向上を目的とし、病院と連携した校内研修を実施し、病弱教育の専門性を高める。 ・「基礎的環境整備」「合理的配慮」について校内の共通理解に努める。</p> <p>(3)・転入・転出時に関係機関と開くケース会議の充実を図り、前籍校・医療機関との連携に努める。 ・前籍校と連携して転入前・退院後の児童生徒の状況把握に務め、教育支援を続けることで、児童生徒の安心で安全な本校への転入と前籍校への復学を支援する。</p>	<p>(1)安全点検の強化と災害発生時の帰宅マニュアルに沿った訓練を行う。学校教育自己診断の児童生徒・保護者の肯定率を 70%以上とする。(H29 児童生徒 61%、保護者 50%)</p> <p>(2)校内外向けの病院と連携した新規研修を立ち上げる。学校教育自己診断の教員向けの質問の肯定率を 85%以上とする。(H29 年度 教員 80%)</p> <p>(3)医教連絡会、カンファレンスに校長又は教頭が必ず参加する。学校教育自己診断の保護者・医療機関向け質問の肯定率 90%以上とする。(H29 年度保護者 88%、医療機関 73%)</p>	<p>(1)今年度発生した自然災害時の対応を振り返り、病棟との連携や災害時の連絡方法に課題があった。災害時の対応に対する保護者の肯定的評価は 57%と微増したもののまだ少ない。病棟との連携と保護者への周知を図っていきたい。(△)</p> <p>(2)4 部署で病棟と連携した外部セミナーを実施した(H29:3 部署)。学校教育自己診断の教員肯定的評価も 86%と上昇している。セミナーの実施は専門性の向上にもつながることであり、今後も進めていきたい。(○)</p> <p>(3)病院・前籍校との連携において、保護者の肯定的評価が 70%となり、減少している。一方、医療関係者からの評価は 87%が肯定的評価と増加していることから、一定連携は進んでいるものの、保護者への説明が不足しているのではないかと考えられる。連携を進めながら、保護者へのより丁寧な説明が必要となっている。(△)</p>
3 自己と他者との関係づくりをすすめる、自身の夢を実現できる学校づくり	<p>(1)病気への不安や家族・友人と離れた孤独感を克服し、病気の理解と自己の理解を進める。</p> <p>(2)学校行事等を通して、周囲の人々や地域社会との繋がりを実感し、「自己肯定感」を育てる。</p> <p>(3)キャリア教育の充実を図り、1 人ひとりが自己実現に向けて具体的に考える力を養う。</p>	<p>(1)・転入時、児童生徒の実態把握を徹底し、安心で安全な授業を可能とする環境づくりに努める。 ・児童生徒及び保護者の気持ちに寄り添い、体調等を気遣う温かい言葉やさりげない配慮に徹する。</p> <p>(2)・各部、各分教室において、児童生徒が主体となり準備・練習に取り組む学校行事を継続する。 ・創作・表現活動の充実を図り、校内・病院・地域の作品展等への児童生徒の作品の展示を積極的に行う。</p> <p>(3)・QOL を意識したキャリア教育の取り組みを継続する。また、各部・各分教室のキャリア教育に関する取り組みを集約する。 ・高等部における職場体験実習については、職場開拓も含め、生徒の実態に応じた実習を検討する。</p>	<p>(1)全教員が児童生徒の情報を共有し、適切な支援と必要な配慮を教職員がお互いに理解できるように努める。児童生徒・保護者向け質問の肯定率を 80%以上とする。(H29 年度児童生徒 68%、保護者 77%)</p> <p>(2)授業時間を確保しつつ、児童生徒の行事への積極的参加に取り組む。児童生徒の作成した作品等を校内・病院はもとより、地域の作品展に出品する。児童生徒・保護者向け質問の肯定率を 55%以上とする。(H29 年度児童生徒 49%、保護者 41%)</p> <p>(3)年度末に部署ごとに実践報告を行い、全教員で取組みの共通理解に努める。</p>	<p>(1)子どものことについて保護者の悩みや相談に応じているかという質問において、保護者からの肯定的評価は 49%と大きく減少した。この質問については無回答が 48%となっており、保護者と会う機会の減少とも重なっている。児童生徒による肯定的評価は 80%あることから、保護者へのより丁寧な対応を心がけていきたい。(△)</p> <p>(2)行事に対する評価においては、児童生徒の 90%が肯定的にとらえており、児童生徒の満足度は高い。保護者においては 48%であったが、無回答が 52%となっており、保護者の理解という点において不足している。保護者を含めた行事の実施について検討していきたい。(△)</p> <p>(3)12/25 に 3 部署より実践報告を行った。日頃は別々に活動しているが、実践報告会を通して部署間の理解を進めることができた。今年度は、実践報告集『とねやま』を発行することもでき、教育力の向上につなげることができた。(◎)</p>

4 病弱教育の専門性の向上とセンター的機能の発揮	<p>(1) 本人・保護者のニーズ、在籍期間を考慮し「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の活用を推進する</p> <p>(2) 学校外での研修に積極的に参加し、伝達講習等を行うことで、学校全体の教育力の向上に努める</p> <p>(3) 病弱教育の理解促進を図り、支援のニーズの把握に務め、府内外に病弱教育に関する情報発信を行うとともに教育相談を積極的に受け入れる。</p>	<p>(1) 個別の教育支援計画」「個別の指導計画」を作成し、授業計画に反映させる。学習の評価に係り、授業の進め方を含めて地元校との連携を強化する。</p> <p>(2) ・研修部を中心に校内研修を実施し、経験の浅い教員への学ぶ機会を作る。 ・校外研修への参加を推奨し、病弱教育に係る新しい情報の校内の共有に努める。</p> <p>(3) ・各部・各分教室主催のセミナーを充実させるとともに、大阪病弱教育研究会を支援する。また、上部研究会（全病連、近病連）とも連携する。 ・精神医療センターの業務に地域支援のセンター的業務を追加する。</p>	<p>(1) 児童生徒の転入時のカンファレンスに重点を置き、個別の教育目標を明確にする。また、観点別評価の定着を図り、地元校と連携し児童生徒の成績管理を行う。</p> <p>(2) 研修部で校内の研究授業を取りまとめ、初任者を中心とした定期的な各部・各分教室の授業交流を行う。</p> <p>(3) 本校主催の府内向けの研修の周知を徹底する。本校に置いていた地域支援部の一部を精神医療センターに移し、地域支援に関わるセンター的機能を両部署で主担する。</p>	<p>(1) 進路指導部を中心に、評価方法の見直しを行うとともに、観点別評価を進めることができた。特に中学生においては、転入の早い段階で成績に関して地域校と綿密な連携を行うことで、相互の信頼関係を築いていく必要がある。(○)</p> <p>(2) 全部署において、病棟との連携研修及び部署独自の研修の実施等、専門性の向上に努めた。部署ごとに診療科が異なるため、それぞれで必要な専門的知識がある。児童生徒の病状に合わせた支援の充実を図るために、今後も専門性の向上を図っていきたい。(○)</p> <p>(3) HP や市町村への情報提供を行い、研修の周知を図った。筋ジストロフィーのある児童生徒への支援だけでなく、心身症のある児童生徒への支援についても進めることができた。(○)</p>
5 組織力の向上	<p>(1) 各部・各分教室で異なる医療や教育環境に対応し、適切な教育活動を展開できるように分掌組織を再考する</p> <p>(2) 各部・各分教室において、教材・実践例等の共有を促進し、教育活動の共通理解に努める</p> <p>(3) 医療・福祉・前籍校との連携を深めて協力することで児童生徒の学習環境の適正化を図る</p>	<p>(1) ・教職員の服務に関する規則（働き方等）についての共通理解に努める。 ・分掌組織を再考し、効果的な運営ができる学校組織の構築に取り組む。 ・転入・転学に係る書類の管理を取りまとめる業務を教頭・首席が中心となるチームへと移行する。</p> <p>(2) ・各市町村の教科書や図書の共有化を図る。教科書・指導書等の蔵書の管理を電子データ化する。 ・学校全体で教材・教具・実践事例や経験等の共有化を進める。 ・各分教室での学習スペースの確保に努める。精神医療センターに追加した中学部教室の設備の充実に努める。</p> <p>(3) より良い連携の在り方を考えるため、各部署で行われている医療機関その他との情報交換を綿密に行い、関係機関との連携を強化する。</p>	<p>(1) 年度末に各項目について総括し、校内で報告する。平成 30 年度末までに学校組織の再編をめざす。学校教育自己診断の教員向け質問への肯定率 80%以上とする。(H29 年度 教員 77%)</p> <p>(2) 指導書等を本校図書で管理し、平成 30 年度中に全部署に S S C ネットワークの配置をめざし、教材・教具・実践事例をネットワーク上で一括記録・保存する。また児童生徒の学習スペースの確保を行う。</p> <p>(3) 連携するすべての医療機関の意見をまとめて学校全体で共有する。学校教育自己診断の病院関係者向け質問への肯定率 80%以上とする。(H29 年度 病院 73%)</p>	<p>(1) 学校組織が有効に機能しているかという質問に対し、79%が肯定的な評価をしている。分掌長が運営委員会に出席することにより、校内を多方向から考えることができた。分掌の再編については、より効果的な運営ができるよう進めていく必要がある。(△)</p> <p>(2) ネットワークの接続状況には課題が残るものの支援教育課の協力により、S S C の配置がかなり進んだ。個人情報保護という観点からも、S S C の活用は重要である。また、精神医療センターの学習スペースについては、病院の協力により確保することができている。今後も病院及び関係課との協力を密にし、進めていきたい。(○)</p> <p>(3) 病棟と連携して教育活動を行っているという質問において、87%の医療関係者から肯定的評価があった。日々の情報共有や問題があった際の迅速な対応を評価いただけたものと考え。さらにきめ細やかな対応を心がけ、多職種連携を進めていきたい。(○)</p>